

# 湯女の魂

泉鏡花

青空文庫



誠に差出がましく恐入りますが、しばらく御清聴を煩わします。

八宗の中にも真言宗には、秘密の法だの、九字くじを切るだのと申しまして、不思議なことをするのでありますが、もつともこの宗門の出家方は、始めから寒垢離かんごり、断食など種々さまざまな方法で法を修しゆするのでございまして、向うに目指す品物を置いて、これに向つて呪文じゆもんを唱え、印を結んで、鍊磨の功を積むのだそうであります。

修鍊の極致に至りますと、隱身避へきすい水かすん火遁かすんの術などはいうまでもございませぬ、如意自在な法を施でらすことが出来るのだと申すことで。

ある真言寺でらの小僧が、夜分墓原を通りますと、樹と樹との間に白いものがかかって、ふらふらと動いていた。暗さは暗し、場所柄は場所柄なり、可おそろし恐おそろしさの余り齒の根も合わずふる顫え顫え呪文を唱えながら遁にげ帰りましたそうでありませんが、翌日見まするとそこに乾かしてございました浴衣が、ずたずたに裂けていたと申しますよ、修行もその位になりましたこの小僧さんなどは、向つて九字を切ります目当に立てておく、竹切、棒などが折れ

るといいます。

しかし可加減いゝいな話だ、今時そんなことがある訳のものではないと、ある人が一人の坊さんに申しますと、その坊さんは黙もくつて微笑ほほえみながら、拇お指ゆびを出して見せました、ちと落は語家なしかの申まします 薊こん 蕪やく 問答もんたうのようでありまますけれども、その拇お指ゆびを見せたのであります。

そして坊さんが言うのに、まず見た処この拇お指ゆびに、どの位な働はたらきがあると思わおもつしやる、たとえば店みせ頭さきで小僧こぞうどもが、がやがや騒さわいでいる処へ、来たよといいつて拇お指ゆびを出して御覽ごらんなさい、ぴつたりと静しずましよう、また若い人にちよつと小指こさきを見せたらどうであらう、銀座ぎんざの通とで手てを挙げれば、鉄道馬車てつどうばしやが停とまるではななかろうか、も一つその上に笛ふえを添そえて、片手ひとてをあけて吹鳴ふいめいらす事ことになりますと、停ステイ車場シヨンを汽車きしやが出でますよ、使つかい処ところ、用もちい処ところに困こつては、これが人命じんめいにも関かわれれば、喜怒きど哀楽あいらくの情なさけも動うかします。これをでかばちに申ましたら、国家こくがの安危あふゐに係かわるようような、機お会りがないとも限からぬ、その拇お指ゆび、その小指こさき、その片手ひとての働はたらきで。

しかるをいわんや 臨りん兵びやう闘とう者しや皆かい陣じん列れつ在つぎ前いぜん といい、 令りやう百ひやく由ゆ旬じゆん内ない無む諸しよ哀あ艱げん と  
唱なえて、四し縦じゆう五ご行ぎやうの九く字じを切きるにおいては、いいかばかり不ふ思し議ぎの働はたらきをするするかも計はらられまい、  
と申ましたといいうことを聞きいたのであります。

いや、余事を申上げまして恐入りますが、唯今私が不束に演じますお話の中頃に、山中孤家の怪しい婦人が、ちちんぷいぷい御代の御宝と唱えて蝙蝠の印を結ぶ処がありますから、ちよつと申上げておくのであります。

さてこれは小宮山良介という学生が、一夏北陸道を漫遊しました時、越中の国の小川という温泉から湯女の魂を託つて、遙々東京まで持つて参つたというお話。

越中に泊と云つて、家数千軒ばかり、ちよつと繁昌な町があります。伏木から汽船に乗りますと、富山の岩瀬、四日市、魚津、泊となつて、それから糸魚川、関、親不知、五智を通つて、直江津へ出るのであります。

小宮山はその日、富山を朝立、この泊の町に着いたのは、午後三時半頃。繁昌な処と申しながら、街道が一条海に添つておりますばかり、裏町、横町などと、謂つてもないのであります、その町の半頃のと有る茶店へ、草臥れた足を休めました。

## 二

沏茶を喫しながら、四辺を見る。街道の景色、また格別でございまして、今は駅路の鈴

の音こそ聞えませぬが、馬、車、処の人々、本願寺詣の行者の類、これに豆腐屋、魚屋、郵便配達などが交つて往来引きも切らず、「早稲の香や別け入る右は有磯海」という芭蕉の句も、この辺という名代の荒海、ここを三十噸、乃至五十噸の越後丸、観音丸などと云うのが、入れ違います煙の色も荒海を乗越すためか一際濃く、且つ勇ましい。

茶店の裏手は遠近の山また山の山続きで、その日の静かなる海面よりも、一層かえつて高波を蜿らしているようでありました。

小宮山は、快く草臥を休めましたが、何か思う処あるらしく、この茶屋の亭主を呼んで、「御亭主、少し聞きたい事があるんだが。」

「へい、お客様、何でござりますな。」

氷見鱈の塩味、放生津鱈の善悪、糸魚川の流れ塩梅、五智の如来へ海豚が参詣を致しまする様子、その鳴声、もそつと遠くは、越後の八百八後家の因縁でも、信濃川の橋の間数でも、何でも存じておりますから、はははは。」

と片肌脱、身も軽いが、口も軽い。小宮山も莞爾して、

「折角だがね、まずそれを聞くのじやなかったよ。」

「それはお生憎様でござりまするな。」

何が生憎。

「私の聞きたいのは、ここに小川の温泉と云うのがあるツて、その事なんだがどうだね。」  
 「ええ、ござりますとも、人足ひとあしも通いませぬ山の中で、雪の降る時しつさぎ白鷺きざしが一羽、疵きずし所よを浸しておりましたのを、狩人の見附けましたのが始りで、ついこの八九年前から開けました。一体、この泊のある財産家の持地でござりますので、飯ほんの小屋掛で近在の者へ施し半分に遣やつておりました処、さあ、盲目めくらが開く、躰いざりが立つ、子供が産れる、乳が出る、大した効能。いやもう、神しんのごととござりまして、所々方々から、彼岸詣ひがんもうでのように、ぞろぞろと入湯に参りまする。

ところで、二階家を四五軒建てましたのを今では譲受けた者がござりまして、座敷も綺麗さかな、お肴さかなも新らしい、立派な本場の温泉となりまして、私はかような田舎者で存じませぬが、何しろ江戸の日本橋ではお医者様でも有馬の湯でもと云うた処を、芸者が、小川の湯でもと唄うそうでござりますが、その辺は旦那御存じでござりましような。いかが様で。」  
 反対あべこへに鉄砲を向けられて、小宮山は開いた口が塞ふさぎがらず。

「土地繁昌もとしの基もとで、それはお目出度い。時に、その小川の温泉までは、どのくらいの道だろ。」

「ははあ、これからいらつしやるのでござりますか。それならば、山道三里半、車夫<sup>くるまや</sup>などにお尋ねになりますれば、五里半、六里などと申しますが、それは丁場の代価<sup>ねだん</sup>で、本当に訳はないのでござりまする。」

「ふむ、三里半だな可<sup>よ</sup>し。そして何かい柏<sup>かし</sup>屋<sup>わや</sup>と云う温泉宿は在るかね。」

「柏屋！ ええもう小川で一等の旅籠<sup>はたごや</sup>屋、畳もこのごろ入換えて、障子もこのごろ張換えて、お湯もどんどん沸いております。」

と年甲斐もない事を言いながら、亭主は小宮山の顔を見て、いやに声を密<sup>ひそ</sup>めたのでありますな、怪<sup>けし</sup>からん。

「へへへ、好<sup>い</sup>い婦人<sup>おんな</sup>が居<sup>お</sup>りますぜ。」

「何を言っているんだ。」

「へへへ、お湯をさして参りましょうか。」

「お茶もたと頂<sup>いただき</sup>いたよ。」

と小宮山は傍<sup>わき</sup>を向いて、飲<sup>の</sup>さしの茶を床<sup>しよ</sup>几<sup>うぎ</sup>の外へざぶり明けて身支度<sup>みしよ</sup>に及びまする。

小宮山は亭主の前で、女の話<sup>はなし</sup>を冷然として勿<sup>は</sup>ね附けましたが、密<sup>ひそか</sup>に思<sup>おも</sup>う処<sup>ところ</sup>がないのでは  
 ありませぬ。一体この男には、篠田<sup>しのだ</sup>と云う同窓の友<sup>とも</sup>が<sup>あ</sup>りまして、いつでもその口<sup>くち</sup>から、  
 足下<sup>そつが</sup>もし折<sup>ま</sup>があつて北陸道<sup>ほくりくどう</sup>を漫遊<sup>まんゆう</sup>したら、泊<sup>とまり</sup>から訳<sup>わけ</sup>はない、小川の温泉<sup>おんせん</sup>へ行<sup>い</sup>つて、柏屋<sup>かしら</sup>と  
 云<sup>い</sup>うのに泊<sup>とまり</sup>つてみる、於雪<sup>おゆき</sup>と云<sup>い</sup>つて、根津<sup>ねづ</sup>や、鶯<sup>うぐいすだに</sup>谷<sup>たに</sup>では見<sup>み</sup>られない、田舎<sup>いんさ</sup>には珍<sup>めづ</sup>らし  
 い、佳<sup>い</sup>い女<sup>おんな</sup>が居<sup>い</sup>るからと、度々<sup>たびたび</sup>聞<sup>き</sup>かされたのでありますが、ただ、佳<sup>い</sup>い女<sup>おんな</sup>が居<sup>い</sup>るとばかり  
 ではない、それが篠田<sup>しのだ</sup>とは浅<sup>あ</sup>からぬ関係<sup>かんけい</sup>があるように思<sup>おも</sup>われます、小宮山<sup>こみやま</sup>はどの道<sup>みち</sup>一泊<sup>ひととまり</sup>  
 するものを、乾燥<sup>かんそう</sup>無<sup>む</sup>味<sup>み</sup>な旅籠屋<sup>りやうりや</sup>に寝<sup>ね</sup>るよりは、多少<sup>いろうつや</sup>色<sup>いろ</sup>艶<sup>つや</sup>つぽいその柏屋<sup>かしら</sup>へと極<sup>き</sup>めたので  
 さて、亭主<sup>ていしゅ</sup>の口<sup>くち</sup>と盆<sup>ぼん</sup>の上<sup>うへ</sup>へ、若<sup>わか</sup>干<sup>か</sup>かお鳥目<sup>とりめ</sup>をは<sup>は</sup>ずんで、小宮山<sup>こみやま</sup>は紺飛白<sup>こんがすり</sup>の单衣<sup>ひとえ</sup>、白<sup>しろ</sup>  
 縮緬<sup>ろぢりめん</sup>の兵児帯<sup>へいこおび</sup>、麦藁<sup>むぎわら</sup>帽子<sup>ぼうし</sup>、脚絆<sup>きゃはん</sup>、草鞋<sup>わらじ</sup>という扮装<sup>いでたち</sup>、荷物<sup>にもの</sup>を振分<sup>ひり</sup>にして肩<sup>かた</sup>に掛<sup>か</sup>け、  
 既に片影<sup>かたかげ</sup>が出来<sup>でき</sup>ておりますから、蝙蝠傘<sup>こうもりがさ</sup>は畳<sup>たたみ</sup>んで提<sup>ひ</sup>げながら、茶店<sup>ちあてん</sup>を発<sup>た</sup>つて、従<sup>これより</sup>是<sup>こゝ</sup>小  
 川温泉道<sup>こがわおんせんどう</sup>と書<sup>か</sup>いた、傍示杭<sup>ぼうしくい</sup>に沿<sup>したが</sup>って参<sup>まゐ</sup>ります。  
 行<sup>ゆ</sup>くことおよそ二里<sup>にり</sup>ばかり、それから爪先<sup>つまさき</sup>上<sup>あ</sup>りのだらだら坂<sup>さか</sup>になつた、それを一里半<sup>いちりはん</sup>、  
 泊<sup>とまり</sup>を急<sup>いそ</sup>ぐ旅人<sup>りょじん</sup>の心<sup>こゝろ</sup>には、かれこれ三里<sup>さんり</sup>余<sup>あ</sup>も来<sup>き</sup>たらうと思<sup>おも</sup>うと、ようやく小川<sup>こがわ</sup>の温泉<sup>おんせん</sup>に着<sup>き</sup>  
 ましてございます。

志す旅籠屋は、尋ねると直ぐに知れた、有名なもので、柏屋金蔵。

そのまま、ずっと小宮山は門口かどぐちに懸かかります。

「いらつしやいまし。」

「お早いお着つき。」

「お疲れ様で。」

と下女共おんなが口々に出迎えます。

帳場に居た亭主が、算盤そろばんを押遣つて

「これ、お洗足すすぎを。それ御案内を。」

とちやほや、貴公子に対する待遇もてなし。服装もお聞きの通り、それさえ、汗に染み、埃ほこりに塗まみれた、草鞋穿わらじばきの旅人には、過ぎた扱いをいたします。この温泉場は、泊からわずか四五里の違いで、雪が二三尺も深いのでありまして、冬向は一切浴客よっかくはありませんで、野猪しし、狼たぐい、猿さぎの類、鷺しんの進かりくろう、雁かりくろう九郎などと云う珍客さんぶくに明け渡して、旅籠屋は泊の町へ引上げるくらい。賑にぎわいますのは花の時分、盛夏さんぶく三伏ころおいの頃、唯今はもう九月中旬、秋の初はじめで、北国ほっこくは早く涼風すずかぜが立ますから、これが逗留とうりゆうの客と云う程の者もなく、二階も下も伽藍堂がらんどう、たまたまのお客は、難船が山の陰を見附けた心持でありますから。

「こつちへ。」と婢女おんなが、先に立つて導きました。奥座敷上段の広間、京間の十畳で、本ほん床んじこ附、畳は滑るほど新らしく、襖ふすま天井は輝くばかり、誰たれの筆とも知らず、薬草くわを銜くわえた神農様の画像の一軸、これを床の間の正面に掛けて、花は磯馴そなれ、あすこいらは遠州が流行りまする処で、亭主の好きな赤烏帽子あかえぼし、行儀を崩さず生かっている。

小宮山はその前に、悠然と控えました。

さて、お茶、煙草たばこ盆、御挨拶ごあいさつは略しまして、やがて持つて来た浴衣に着換えて、一風呂浴びて戻る。誠や温泉の美しくしき、肌、骨までも透通り、そよそよと風が身に染みる、小宮山は広袖どじらを借りて手足を伸ばし、打うちくつろ縦いでお茶菓子ちやくしの越こしの雪、否、広袖だの、秋風だの、越の雪だのと、お愛想までが薄ら寒い谷川の音ももの寂しい。

湯上りで、眠気は差したり、道中記を記つけるも懶ものうし、入いる時帳場で声を懸けたのも、座敷へ案内をしたのも、浴衣を持つて来たのも、お背中を流しましょうと言ったのも、皆手て隙すきと見えて、一人々々入いれかわ交かわったが、根津、鶯谷はさて置いて柳原にもない顔だ、於雪と云うのはどうしたろう、おや女の名で、また寒くなった、これじゃ晩あつかんに熱あつかん爛らんで一杯遣らずばなるまい。

## 四

鮎あゆの大きいのは越中の自慢であります、もはや落鮎はうじになっておりますけれども、放生ほうじの鯉うづや、氷見ひみの鯖さばより優ましでありますから、魚田ぎよでんに致ぎさせまして、吸物ゆざんは湯山の初はつたけ茸、後は玉子焼たまごやきか何かで、一銚ちようし子こつけさせまして、杯洗はいせんの水を切るのが最はじまり初。

「姉さん、お前に一つ。」

などと申しまする時分には、小宮山も微ほろよい酔よ機嫌がい、向うについておりますのは、目指すお雪ではなくて、初霜とや謂わむ。薄く塗った感心に襟脚はたぢの太くない、二十歳はたちばかりの、愛あい嬌きようたつぷりの女で、二つ三つは行ける口、四方山よもやまの話も機はずむ処ところから、小宮山も興きように入り、思わず三四合を傾かたけます。

後の花うしろが遠州で、前の花が池の坊に座を構え、小宮山は古流という身で、くの字になり、ちよいと杯を差置きました、

「姉さん、新らしく尋ねるまでもないが、ここはたしか柏屋だね。」

「はい、さようでございますよ。」

「柏屋だとするとその何、姉さんが一人ある筈はずだね。」

「皆で四人。」

「四人？ 成程四人かね。」

「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「何、お雪さんと云うのが居る？」

と小宮山は、金の脈を掘当てましたな、かねての話が事実となつたのでありますから、漫に勇んだので乗出しようが尋常事ただごとではありませんから、

「おや。」

小宮山はわざとらしく威儀を備え、

「そうだ、お前さんの名は何と云う。」

「そうだは御挨拶でございますこと、私は名も何もなんにございませんよ。」

「いいえさ、何と云うのだ。」

「お雪さんにお聞きなさいまし、貴方あなたは御存じでいらつしやるんだよ、可憎にくらしゆうございますねえ、でもあのお気の毒さまでございますこと、お雪さんは貴方、久しい間病気で臥ふせつておりますが。」

「何、病気だい、」

「はあ、ぶらぶら病やまいなんでございますが、このごろはまた氣候が変りましたので、めつきりお弱よわなすつたようで、取乱とらましておりますけれど、貴方御用ならばちよいとお呼び申してみましようか。」

「いえ、何、それにや及ばないよ。」

「あのう、きつと参りましようよ、外ならぬ貴方様の事でございますもの。」

「どうでしょうか、此方こなた様にも御存じはなしさ、ただ好い女だつて途中で聞いて来たものだから、どうぞ悪あしからず。」

「どう致しまして、憚はばかりさま様。」

と言つたばかり、ちよいと言葉が途絶えましたから、小宮山は思い出したように、

「何と云うのだね、お前さんは。」

「手前は柏屋でございます。」

小宮山は苦にが笑わらいを致しましたが、已やむ事を得ず、

「それじゃ柏屋の姉さん、一つ申上げることによしよう。」

「まあお酌を致ましよう。私だつて可いいじゃありませんか、あれさ。」

「いや全く。お雪さんでも、酒はもう可いかんのだよ。」

「それじゃ御飯をおつけ申しませう、ですがお給仕となるとなのおの事、誰かにおさせなさりとうございませうね。」

「何、それにや及ばんから、御鼻<sup>ごひいき</sup>肩<sup>もり</sup>分に盛<sup>よ</sup>を可<sup>よ</sup>く、ね。」

「いえ、道中筋で盛の可いのは、御家来衆に限りませうとき、殿様は軽くたんと換えて召<sup>めしあ</sup>食<sup>が</sup>りまし。はい、御膳<sup>ごぜん</sup>。」

「洒落<sup>しやれ</sup>かい、いよ柏屋の姉さん、本当に名を聞かせておくれよ。」

「手前は柏屋でございます。」

「お前の名を問うのだよ。」

「手前は柏屋でございます。」

と上手に御飯<sup>よそ</sup>を装<sup>よそ</sup>いながら、ぽたぽた愛嬌<sup>こぼ</sup>を溢<sup>こぼ</sup>しますよ。

## 五

御膳の時さえ、何かと文句があつたほど、この分では寝る時は容易でなかうと、小宮山は内々恐縮をしておりましたが、女は大人しく床を伸べてしまいました。夜具は申すま

でもなく、絹布けんぷの上、枕まくらもと頭の火桶ひおけへ湯沸ゆわかを掛けて、茶盆をそれへ、煙草盆に火を生ける、手当が行届くのであります。

あまりの上首尾、小宮山は空可そらおそろ恐しく思っております。女は慇懃いんぎんに手を突いて、

「それでは、お緩り御寝ゆつくおやすみなさいまし、まだお早うございますから、私共は皆起みんなきております、御用がございましたら御遠慮なく手をお叩き遊ばして、それからあのお湯でございますが、一晩沸いておりますから、幾度でも御自由に御入り遊ばして、お草臥くたびれにも、お体にも大層利きますんでございますよ。」

と大人しやかに真面目まじめな挨拶、殊勝な事と小宮山も更あらたまり、

「色々お世話だった。お蔭で心持好よく手足を伸すよ、姐ねえさんお前ももう休んでおくれ。」

「はい、難ありがと有うございます、それでは。」

と言つて行こうとしましたが、ふと坐り直しましたから、小宮山は、はてな、柏屋の姐さん、ここらでその本名を名告なのるのかと可笑おかしくもございます。

すると、女は後先みまわをしましたが、じりじりと寄つて参り、

「時につかぬ事をお伺い申しまして、恐れ入りますが、貴方は方々御旅行をなさいます、可おそろ恐しい目にお逢い遊ばした事はございませんか。」

小宮山は、妙な事を聞くと思いましたが、早速、

「いや、幸い暴風雨にも逢わず、海上も無事で、汽車に間違もなかった。道中の胡麻ごまの灰などは難有ありがたい御代みよの事、それでなくつても、見込まれるような金子かねも持たずさ、足も達者で一日に八里や十里の道は、団子を嚙かじつて野々宮高砂たかさごというのだから、ついぞまあこれが可恐おそろしいという目に逢つた事はないんだよ。」

「いえ、そんな事ではないのでございます。狸が化けたり、狐が化けたり、大入道が出ましたなんて、いうような、その事でございます。」

「馬鹿な事を言つちや可いかん、子供が大人になつたり、嫁めかけが姑しゅうとになつたりするより外、今時化けるつて奴やつがあるものか。」

と一言の許もとに笑つて退のけたが、小宮山はこの女何を言うのかしらと、かえつて眉毛つぽに唾つばを附けたのであります、女は極く生真面目で、

「実はお客様、誠に申兼ねましたが、少々お願いがございしますんですよ、外の事ではありませんが、さつき貴方のお口からも、ちよいとお話のございました、あのお雪さんの事でございしますが、佳いい女はなぜあんなに体が弱いのでございませうねえ。平生ふだんからの処へ、今度煩わづらい附きまして、もう二月三月、十日ばかり前から、また大変に悩みますので、医者

と申しまして、三里も参らねばなりません。薬も何も貴方何の病気だか、誰にも考えが付きませぬので、ただもう体の補いになりますようなものを食べさせておくばかりでございませぬが、このごろじや段々痩せ細つて、お粥も薄いのでなければ戴かないようになりました。気心の好い平生大人しい人でありますから、私共始め御主人も、かれこれ氣を揉んでおりますけれども、どこが痛むというではなし、苦しいというではなし、労りようがないのでございますよ。それでね、貴方、その病氣と申しますが、風邪を引いたの、お肚を痛めたのというのではない様子で、まあ、申せば、何か生靈が取着いたとか、狐が見込んだとかいうのでございませぬ。何でも悩み方が変なのでございますよ。その証拠には毎晩同じ時刻に魘されましてね。」

小宮山も他人ごとのようには思いません。

## 六

「その時はどんなに可恐しゅうございませぬ、苦しいの、切ないの、一層殺して欲しいの、とお雪さんが呻きまして、ひいひい泣くんでございませぬ、そしてね貴方、誰かを

掴つかまえて話でもするようには、何だい誰だ、などと言うではございませんか、その時はもう内うち曲ちやわの者一同、傍そばへ参りますどころではございませんよ、何だつて貴方、異類異形のものが、病人の寝間にむらむらしておりますようで、遠くにいて皆みんなが耳みみを塞ふさいで、突伏つツぶしてしましますわ。

それでは、その苦しみます時傍そばに附ついていて、撫なで擦さりなどする事は誰も怪我けがにも出来ません。病人は薬より何より、ただ一晚おちおち心持好く寐ねて、どうぞせ助らないものを、せめてそれを思い出にして死にたいと。肩息で貴方ね、口癖のように申すんですよ、どうぞまあそれだけでも協かなえてやりたいと、皆みんなが心配をしますんですが、加持祈かじきとう禱とうと申しまして、どうして貴方ここいらは皆狸みんなの法印、章魚たこの入道ばかりで、当あてになるものはありません。

それに、本人を倚掛よっかかせませすのには、しつかりなすつて、自分でお雪さんが頼母たのもしがるような方でなくつちや可いけますまい、それですのにちよいちよいお見えなさいます、どのお客様も、お止し遊あそばせば可いのには、お妖怪ばけと云えば先方さきで怖おそがりです、田舎の意気いき地無じしばかり、俺おいらは蟒蛇うわばみに呑のまれて天窓あたまが兀はげたから湯治に來たの、狐に蚯蚓みみずを食くわされて、それがためお肚なかを痛めたの、天狗に腕を折られたの、私共が聞いてさえ、馬鹿々々

しいような事を言つて、それが真面目だろうじやありませんか。

ですもの、どうして病人の力になんぞ、なつてくれる事が出来ましょう。

こう申しちや押着けがましゆうございますが、貴方はお見受け申したばかりでも、そんな怪しげな事を爪先へもお取上げ遊ばすような御様子は無い、本当に頼母しくお見上げ申しますんで。

実は病人は貴方の御話を致しました処、そうでなくつてさえ東京のお方と聞いて、病人は飛立つばかり、どうぞお慈悲にと申しますのは、私共からもお願い申して上げますのでございませが、誠に申しかねましたが、一晩お傍そばで寝かしくださいまして、そうして本人の願ねがいを協かなえさしてやつて下さいますし、後生でございませから。

それに様子をお見届け下さいますれば、どんなにか難ありがと有うございませしよう。」

としみじみ、早口の女の声も理に落ちまして、いわゆる誠はその色に顯あらわれたのでありますから、唯今怪しい事などは、身の廻り百ひやく由ゆ旬じゆんの内へ寄せ附けないという、見立てに預あずかりました小宮山も、これを信じない訳には行かなくなつたのであります。

「そりや何しろとんだ事だ、私は武者修行じやないのだから、妖怪を退治するという腕うでつづ節しはないかわりに、幸い臆おくびよう病びようでないだけは、御用に立つて、可いとも！ 望みなら

一晩看病をして上げよう。ともかくも今のその話を聞いても、その病人を傍そばへ寝かしても、どうか可おそろ恐しくないように思われるから。」

と小宮山は友人の情婦いろではあり、煩わづらっているのが可哀あはれそうでもあり、殊ととには血氣さかん壯さかんなものの好奇心も手伝てんつて、異議いぎなく承知ちやうちを致いたしました。

「しかし姐ねえさん、別々べつべつにするのだろうね。」

「何なにでございます。」

「何なにその、お床とこの儀ぎだ。」

「おほほ、お雪ゆきさんにお聞きなさいまし。」

「可うらや煩まいな、まあ可うらやいや。」

「さようならば、どうぞ。」

「可よし可よし。そのかわり姐ねえさん、お前の名なを言いわないのじゃ……、」

「手前てまえは柏屋かしわやでございます。」

と急いそいで出て行く。

これからお雪、良助、寢物ものすこ語ごという、物もの凄すこい事に相成あはります。

## 七

「これは旦那様。」

入交つて亭主柏屋金蔵、もみで揉手をしながらさきに挨拶に來た時より、打解けましてなれなれ馴々しく、

「どうも行届きませんで、御粗末様でございます。」

「いや色々、さあずつとこちらへ、何か女中が御病氣だそうで、お前さんも、何かと御心配でありましょう。」

「へい、その事に就きまして、唯今はまた飛んだ手前勝手な御難題、早速御聞おききずみ濟下さいまして何とも相済みませぬ。実は私からお願ひ申しまする筈はずでござりましたが、かようなものでも、主人あるじと思召おぼしめし、成りませぬ処をたつても御承知下さいますようでは、恐れ入りまするから、御断おことわりの遊ばし可いよう、わざと女共から御話を致させましたのでござりまするが、かように御心安く御承諾下さいましては、かえつて失礼になりましたのでござりまする。

早速当人にも相伝えまして、久しぶりで飛んだ喜ばせてやりました。全く御蔭様でござ

りまする。何が貴方、かねての心懸こころがけが宜よろしゆうござりまするので、私共もはや、特別に目を懸けまして、他人のように思いませぬから、毎晩魘うなされまするのが、目も当てられませぬ、さればと申して、目を塞ふさいで寝まする訳には参りませぬ、いやもう。」

と言懸けて、頷うなずく小宮山の顔を見て、てかてかとした天窓あたまを搔かき、

「かような頭つむりを致しまして、あてこともない、化物沙汰ざたを申上げまするばかりか、譚言うわごとの薬にもなりませんというは、誠に早やもつての外でござりますが、自慢にも何にもなりません、生得しょうとく大の臆病で、引窓がぱたりといつても箒ほうきが仆たおれても怖おっかな喫驚びつくり。

それに何と、いかに秋風が立つて、温泉場が寂れたと申ししても、まあお聞き下さいまし。とんでもない奴等、若い者に爺婆じじばば交りで、泊さんねむの三衛門が百万遍を、どうでござりましょう、この湯治場へ持込みやがって、今に聞いていらつしやい隣宿で始めますから、けたいが悪いじやごわせんか、この節あ毎晩だ、五智いごで海豚いゐるかが鳴いたって、あんな不景気な声は出しますまい。

憑物つきもののある病人に百万遍の景物じや、いやもう泣きたくなります。はははは、泣くより笑わらいとはこの事で、何に就けてもお客様に御迷惑な。」

「なあに、こつちの迷惑より、そういう御様子ではさぞ御当惑をなさるでありますよう、

こう遣つて、お世話になるのも何かの御縁でしょうから、皆さん遠慮しないが宜しい。」

と二人で差向さしむかいで話をしております内に、お喜代、お美津でありましよう、二人して夜具をいそいそと持運び、小宮山のと並べて、臥床ふしどを設けたのでありますが、客の前と氣を着けましたか、使つてるものには立派過ぎた夜具、敷蒲団しきぶとん、畳んだまま裾すそへふつかりと一つ、それへ乗せました枕は、病人が始終黒髪を取乱しているのでありましよう、夜の具ものの清らかなるには似あ垢あかつ附つきまして、思おも倣いなしか、涙の跡も見えたのでありまする。

お美津、お喜代は、枕まくらの両りょう傍ぼうへちよいと屈かがんで、きゆうつきゆうツと真直まっすぐに引直し、小宮山に挨拶をして、廊下の外へ。

ここへ例の女の肩たに手弱たおやかな片手を掛け、悩ましい体を、少し倚より懸かり、下に浴衣、上へ縷子しゆすの襟かの掛かつた、縞物しまものの、白粉おしろい垢あかに冷たそうなのを襲かねて、寝衣ねまきのままの姿であります、幅狭はばせまの巻附帯まきせ、髪は櫛くし巻まきにしておりますが、さまで結ばれても見えませぬのは、客の前へ出るといので櫛の齒こに女の優しい心を籠こめたものでありましよう。年紀としの頃は十九か二十歳はたち、色は透通る程白く、鼻筋の通りました、窠やっれても下しも脹ふくれな、見からに風の障るさえ痛々しい、葛くずの葉のうらみがちなるその風情。

高が氣病きやみと聞いたものが、思いの外のお雪の様子、小宮山はまず哀れさが先立って、主あるじと顔を見合せます。

介添の女はわざと浮いた風で、

「さあ御縁女様。」

と強く手を引いて扶たすけ入れたのであります。お雪はそんな中うちにも、極きまりが悪かつたと見え、ぼんやり顔をば赧あからめまして、あわれ霜に悩む秋の葉は美しく、蒲団そはの傍へ坐りました。

「お雪さん、嬉しいでしょう。」

亭主までが嬉しそうに、莞爾にこにこ々々して、

「よくお礼を申上げな。」

と言うのであります。別わけて申上げますが、これから立女役たておやまがすべて女寅めとらが煩つたという、優しい哀れな声で、ものを言うのであります。春葉君だと名代の良い処を五六枚、上手に使い分けまして、誠に好い都合でありますけれども、私の地声では、ちつと

も情が写りますまい。その辺は大目に、いえ、お耳にお聞ききこぼ溢しを願ひまして、お雪は面おももはゆげ映えい気に、且つ優しおらしく手を支つかえ、

「難ありがと有う存じます、どうぞ、……」

とばかり、取とりすが纏るように申しました。小宮山は、亭主といい、女中の深切、お雪の風と采りなり、それやこれや胸一杯になりました、思わずほろりと致しましたが、さりげのう、ただ領うなずいていたのでありました。

「そらお雪、どうせこうなりや御厄介だ。お時儀じぎも御挨拶も既に通り越しているんだから、御遠慮を申さないで、早く寝かして戴くと可い、寒いと悪かろう。俺おれでさえぞくぞくする、病人はなおの事ことツた、お客様ももう御寝げしなりまし、お鉄や、それ。」  
と急遽そそくさして、実は逃にげ構がまえも少々、この臆病者は、病人の名を聞いてさえ、悚然ぞつとする様子で、

お鉄こやつ（此奴こやつあ念を入れて名告なる程の事ではなかつた）は袖屏風そでびょうぶで、病人を労いたわつていたのでありますが、

「さあさあ早くその中へ、お床は別々でも、お前さん何だよ御婚礼の晩は、女が先へ寝るものだよ、まあさ、御遠慮を申さないで、同じ東京のお方じゃないか、裏の山から見える

なんて、噂ばかりの日本橋のお話でも聞いて、ぐつと気をお引立てなさいなね。水道の水を召食めしあがツていらつしやれば、お色艶もそれ、お前さんのあの方に、ねえ旦那。」

「まずの。」

と言つたばかりで、金蔵はまじりまじり。大方時刻の移るに従うて、百万遍を気にするのであります。お鉄は元氣好く含羞はにかむお雪を柔やわらかに素直に寝かして、袖を叩き、裾をおさ圧え、

「さあ、お客様。」

と言つたのでありますが、小宮山も人目のある前で枕を並べるのは、気が差ばつして跋ばつも悪うございますから、

「まあまあお前さん方。」

「さようならば、御免を蒙こうむります。伊賀越ごえでおいでなすつたお客じやないから、私わしが股も引穢もひきむそうても穿はいて寝るには及おばんわ、のうお雪。」

「旦那笑じょうだん談ではございませんよ、失礼な。お客様御免下さいまし。」

と二人は一所に挨拶をして、上段の間を出て行きゆまする、親仁おやじは両りょうさげ提たのたばこいれ蓑いれ入れをぶら提げながら、克明はげあたまに禿はげあたま頭たまをちやんと据えて、てくてくと敷居を越えて、廊下へ出で

逢頭あいがしら、わツと云う騒動さわぎ。

「痛え。」とあいたしこをした様子。

さつきから障子の外に、様子を窺うかがつておりましたものと見える、誰か女中の影に怯おびえたのであります。笑うやら、喚わめくやら、ばたばたという内に、お鉄が障子を閉めました。後の十畳敷は寂然ひっそりと致し、二筋の燈とうすみ心は二人の姿と、床の間の花と神農様の像を、朦も朧ろうと照てらします。

## 九

小宮山は所在無さ、やがて横になつて衾ふすまを肩に掛けましたが、お雪を見れば小さやかにふつかりと臥ふして、女雛めびなを綿わたに包んだようであります。もとより内気な女の、先方さきから声を懸かけようとは致いたしませぬ。小宮山は一晚介抱を引受けたのでありますから、まず医者いしやの気になりますと物もいよい好よいのであります。

「姉さん、さぞ心細こまいだろうね、お察し申す。」

「はい。」

「一体どんな心持なんだい。何でも悪い夢は、明かしてぱッぱと言うものだことわざと諺にも云うのだから、心配事は人に話をする方が、気が霽はれて、それが何より保養になるよ。」

としみじみいたわ勞つて問い慰める、真心は通つたと見えまして、少し枕を寄せるようにして、小宮山の方を向いて、お雪は溜ため息を吐つきましたが、

「貴方は東京のお方でございますつてね。」

「うむ、東京だ、これでも江戸こッ児だよ。」

「あの、そう伺いますばかりでも、私は故郷の人に逢いましたようで、お可な懐つかしいのでござりますよ。」

「東京が鼯ひいき貞いかい、それは難ありがたたいね、そしてここいらに、鼯ひいき貞いは珍しいが、何か仔細しさいが有りそうだな。」

小宮山は、聞きませんでもその因縁いわれを知っておりましょう、けれども、思うさま心の内を話さして、とにかく慰めてやりたい心。

「東京は大層広いそうでございますから、泊のものを、こちらで存じておりますような訳には参りますまいけれども、あのう、私は篠田さん様と云う、貴方の御所おところの方に、少し知しり己あがあるのいでございますして。」

小宮山は肚の内はらで、これだな……。

「訳は申上げる事は出来ませんが、そのお方の事が始終かか気に懸りまして、それがために、いつでも泣いたり笑ったり、自分でも解りませんほど、氣を揉もんでおりました。それがあの、病の原因もとなんでございましょう。

昼も夜もどっちで夢を見るのか解りませんような心持で、始終かかふらふら致しておりましたが、お薬も戴きましたけれども、復なほつてからどうという張合がありませんから、弱りますのは体ばかり、日が経たちますと起きてるのが大儀でなりませんので、どこが痛むということもなく、寝てばかりおりましたのでございますよ。」

さあ驕おごれ、手も無くそれは恋病こいわずらいだと、ここで言われた訳ではありませんから、小宮山は人の意氣事を畏かしこまって聞かされたのであります、勿論容体を聞く氣でありますから、お雪の方でも、医者だと思つて遠慮がない。

「久しくそんなに致しております内、ちようどこの十日ばかり前の真夜中の事でございませぬ。寐ねられませぬ目をぱちぱちして、瞶みづめておりました壁の表へ、絵に描かいたように、茫ぼ然んやり、可恐おそしく脊の高い、お神さんの姿が頭あれまして、私が夢かと思つて、熟じつと瞶みづめておられます中、登あしおと音もせず壁から抜け出して、枕まくら頭もとへ立ちましたが、面長で険のある、

鼻の高い、凄<sup>すこ</sup>いほど好<sup>い</sup>い年増<sup>としま</sup>なんでございますよ。それが貴方、着物も顔も手足も、稲<sup>いなび</sup>光<sup>かり</sup>を浴びたように、蒼<sup>まつさお</sup>然<sup>お</sup>で判<sup>はつきり</sup>然<sup>お</sup>と見えました。」

「可<sup>お</sup>訝<sup>か</sup>しいね。」

「当<sup>あたりま</sup>然<sup>え</sup>なら、あれとか、きやツとか声を立てますのでございますが、どう致しましたのでございますか、別に怖<sup>おそ</sup>いとも思<sup>おも</sup>いませんと、こう遣<sup>や</sup>つて。」

と枕<sup>まくら</sup>に顔を仰<sup>あおむ</sup>向<sup>む</sup>けて、清<sup>すず</sup>しい目を睜<sup>みは</sup>つて熟<sup>じゆく</sup>と瞳<sup>とら</sup>を据<sup>す</sup>えました。小宮山は慄<sup>ぞつ</sup>然<sup>ぜん</sup>とする。

「そのお神<sup>かみ</sup>さんが、不思議<sup>ふしぎ</sup>ではありませんか、ちゃんと私の名<sup>な</sup>を存<sup>ぞん</sup>じておりまして、

(お雪<sup>ゆき</sup>や、お前<sup>まへ</sup>、あんまり可<sup>あは</sup>れそうだから、私<sup>わたし</sup>がその病<sup>やま</sup>気を復<sup>な</sup>して上<sup>あ</sup>げる、一所<sup>いここ</sup>においで

と立<sup>た</sup>つたまま手を引<sup>ひ</sup>くように致<sup>いた</sup>しましたが、いつの間<sup>ま</sup>にやら私の体<sup>てい</sup>は、あの壁<sup>かべ</sup>を抜<sup>ぬ</sup>けて戸<sup>かど</sup>外<sup>もと</sup>へ出<sup>で</sup>まして、見<sup>み</sup>覚<sup>おぼ</sup>えのある裏<sup>うら</sup>山<sup>やま</sup>の方<sup>かた</sup>へ、冷<sup>ひや</sup>たい草<sup>くさ</sup>原<sup>はら</sup>の上<sup>うへ</sup>を、貴<sup>あなた</sup>方<sup>かた</sup>、跣<sup>はだし</sup>足<sup>あし</sup>ですたすた参<sup>まゐ</sup>るんでございます。」

「零余子むかごなどを取りに参ります処で、知っておりますんでございますが、そんな家うちはある筈はずはございません、破家あばちやが一軒、それも茫然ほんやりして風が吹けば消えそうな、そこが住居すまいなんでございましょう。お神さんは私を引入れましたが、内に入りますと貴方どうでございましょう、土間の上に台があつて、荒筵あらむしろを敷いてあるんでございますよ、そこらは一面に煤すすぼつて、土間も黴かびが生えるように、じくじくして、隅の方に、お神さんと同じ色の真蒼まつさおな灯あかりが、ちよろちよると点ともれておりました。

(どうだ、お前まへここにあるものを知つてるかい。)とお神さんは、その筵しじの上にあるものを、指ゆびさしをして見せますので、私は恐々こわこわ覗のぞきますと、何だか厭いやな匂におのする、色々な雑物ぞうもつがございました。

(これは、皆人はりつけを磔はりつけに上げる時に結えた縄だ、)つて扱しじいて見せるのでございます。私わたしはもう、気味きみが悪いやら怖いやら、がたがた顫ふるえておりますと、お神さんがね、貴方あなた、ざくりと釘つかを掴つかみまして、

(この釘つちは丑うしの時とき参まり、猿丸さるまるの杉すぎに打う込んだので、呪のろいの念ねんが錆さび附ついているだろう、よくお見。これはね大工だいこうが家を造る時に、誤あやまって守宮やもりの胴どうの中へ打う込んだものじゃ、それから難破なんぱした船ふねの古釘ふるつち、ここにあるのは女の抜髪はきげ、蜥蜴とかげの尾おしりの切れた、ぴちぴち動うごいてるの

を見なくちや可いけない。)と差附けられました時は、ものも言われません。

(お雪、私がこれを何にする、定めしお前は知つていよう。) どうして私が知つておりましよう。

(うむ、知つてる、知つている筈じやないか、どうだ。)と責めるように申しますから、私はどうなる事でしょうと、可おそろしきのあまり、何にも存じませんと、自分にも聞えませんくらい。

(何存ぜぬことがあるものか、これはな、お雪、お前の体に使うのだ、これでその病氣を復なしてやる。)と屹きつと睨にらんで言われましたから、私はもう舌こが硬こわつてしまいましたのでございませぬ。お神さんは落着き払つて、何か身みづくろ繕いをしましたか、呪文のようなことを唱えて、その釘だの縄だのを、ばらばらと私の体へ投附けますじやありませんか。

はッと思ひますと、手も足も顫える事が出来なくなつたので、どうぞございませう、そのまま真ま直すに立つたのでございませぬ。

そう致しますとお神さんは、棚の上からまた一つの赤い色の罫びんを出して、口を取つてまた呪文を唱えますとね、黒い煙が立登つて、むらむらとそれが、あの土間の隅ひろへ寛ひろがります、とその中へ、おどろのような髪を乱して、目の血走つた、鼻とんがの尖つた、瘦やせッこけた女

が、俯向けなりになつて、ぬつくり頭れたのでございますよ。

(お雪や、これは嫉妬で狂死をした怨念だ。これをここへ呼び出したのも外じやない、お前を復してやるその用に使うのだ。)と申しましてね、お神さんは突然袖を捲つて、その怨念の胸の処へ手を当てて、ずうと突込んだ、思いますと、がばと口が開いて、拳が中へ。」

と言懸けました、声に力は籠りましたけれども、体は一層力無げに、幾度も溜息を吐いた、お雪の顔は蒼ざめて参ります。小宮山は我を忘れて枕を半

「そのまま真白な肋骨を一筋、ぼきりと折つて抜取りましてね。

(どうだ、手前が嫉妬で死んだ時の苦しみは、何とこのくらいのもだったかい。)と怨念に向いまして、お神さんがそう云いますと、あの、その怨霊がね、貴方、上下の歯を食い緊つて、(ううむ、ううむ。)と二つばかり、合点々々を致したのでございますよ。

(可し。)とお神さんが申しますと、怨念はまたさつきのような幅の広い煙となつて、それが段々罫の口へ入つてしまいました。

それからでございますが。」

とお雪は打戦うちわなないて、しばらくは口も利けません様子。

## 十一

さてその時お雪が話しましたのでは、何でもその孤家ひとつやの不思議な女が、件の嫉妬くだんで死んだ怨霊のろの胸を発あばいて抜取つたという肋骨あばらほねを持つて前申ぜんしまする通り、釘だの縄だのに、呪のろわれて、動くこともありませんで、病み衰えておりますお雪を、手ともいわず、胸、背ともいわず、びしびしと打ちのめして、

(さあどうだ、お前、男を思い切るか、それを思い切りさえすれば復なる病氣なじやないか、どうだ、さあこれでも言う事を聞かないか、薬は利かないか。)

と責めますのだそうであります、その苦しさ能耐たええられませぬ処ところから、

(御免ごめんなさいまし、御免ごめんなさいまし、思い切ります。)

と息の下で詫わびます。それでは帰してやると言う、お雪はいつの間にか旧もとの閨ねやに帰っております。翌あくる晩ばんになるとまた昨夜ゆうべのように、同じ女おんなが来て手を取つて引出して、かの孤家へ連れてまいり、釘だ、縄だ、抜髪とかけだ、蜥蜴とかけの尾おしりだわ、肋骨あばらほねだわ、同じ事を繰

返して、骨身に応えよと打擲する。

（お前、可い加減な事を言つて、ちつとも思い切る様子は無いではないか。さあ、思い切れ、思い切ると判然言え、これでも薬はまだ利かぬか。）

と言うのだそうでありますな。

申すまでもありません、お雪はとても辛抱の出来る事ではないのですから、きつと思ひ切ると言う。

それではと云つて帰します。

翌晩も、また翌晩も、連夜の事できつと時刻を違えず、その緑青で鑄出したような、蒼い女が遣つて参り、例の孤家へ連れ出すのだそうであります、口頭ばかりで思い切らない、不埒な奴、引摺りな阿魔めと、果は憤りを発して打ち打擲を続けるのだそうでございます。

お雪はこれを口にするさえ耐えられない風情に見えました。

「貴方、どうして思い切れませんのでございましょう。私は余り折檻が辛うございますから、確に思い切りますと言うんですけれども、またその翌晩同じ事を言つて苦しめられます時、自分でも、成程と心付きますが、本当は思い切れないのでございませよ。」

どうしてこれが思い切れましよう、因縁とでも申しますのか、どう考え直しましても、叱つてみても宥めてみても、自分が自由にならないのでございますから、大方今に責め殺されてしまいましよう。」

と云う、顔の蹙れ、手足の細り、たゆげな息使い、小宮山の目にも、秋の蝶の日に当たら消えそうに見えまして、

「死ぬのはちつとも厭いませぬけれども、晩にまた酷い目に逢うのかと、毎日々々それを待つているのが辛くつてなりません。貴方お察し遊ばして。」

本当に慾も未来も忘れましてどうぞまあ一晩安々寐て、そうして死にますれば、思い置く事はないと存じながら、それさえ自由になりません、余りといえば悔しゆうございましたのに、こうやつてお傍に置いて下さいましたから、いつにのう胸の動悸も鎮りまして、こんな嬉しい事はございませぬ。まあさぞお草臥なさいまして、お眠うもございませうし、お可煩うございませうのに、つい御言葉に甘えまして、飛んだ失礼を致しました。「人にも言わぬ積り積つた苦勞を、どんなに胸に蓄えておりましたか、その容体ではなかなか一通りではなからうと思う一部始終を、悉しく申したのであります。」

さつきから黙然として、ただ打領いておりました小宮山は、何と思いましたが力

強く、あたかも虎を搏てうちにするがごとき意気込で、蒲団の端を景気よくとんと打つて、むくむくと身を起し、さも勇ましい顔で、莞爾にっこりと笑いまして、

「訳はない。姉さん、何の事ことたな。」

## 十二

「皆みんなそりや熱のせいだ、熱だよ。姉さんも知ってるだろうが、熱じゃ色々な事を見るものさ。疫えいの神だの瘡ほうそ瘡そうの神だのと、よく言うじゃないか、みんなこれは病人がその熱の形を見るんだつさ。」

なかにも、これはちいツと私が知己ちかづきの者の維新前後の話だけれども、一人、踊で奉公をして、下谷したや辺のあるお大名の奥で、お小姓を勤めたのがね、ある晩お相手から下つて、部屋へ、平生ふだんよりは夜が更けていたんだから、早速つとめお勤いしの衣裳しょうを脱いでちゃんと伸のして、こりや女の嗜たしなみだ、姉さんなんぞも遣るだろうじゃないか。」

「はい。」

「まあお聞きそれから縞しまのお召縮緬めしちりめん、裏に紫縮緬の附いた寝衣ねまきだったそうだ、そいつを

着て、紅梅の扱帯しじきをしめて、蒲団の上で片膝を立てると、お前、後毛おくれげを搔かき上げて、懷紙おしろいで白粉おしろいをあつちこつち、拭ふいて取る内に、唇くちびるに障さわるとちよいと紅べにが附ついたろう。お小姓おこせがね、皺しわを伸のべてその白粉おしろいの着いた懷紙おしろいを見ていたが、何と思つたか、高島田たかしまに挿さして、銀の平打かんまもの簪いのし、※が附ついている、これは助高屋すけたかやとなつた、沢村とつしやう訥とつしやう升しやうの紋もんなんで、それをこのお小姓おこせが、大層ひいき鼻びにきにしたんだつさ。簪かんざしをぐいと抜ひいてちよいと見るとね、莞に爾つこり笑わらいながら、そら今口紅いまくちべにの附ついた懷紙おしろいにぐるぐると巻まいて、と戴いたいたとまあお思おもい。

可かいかい、それを文庫しまへ了しまつて、さあ寢支度しんしども出来た、行燈あんどうの灯ひを雪洞ほんほりに移うつして、こいつを持つとすつと立つて、絹きぬの鼻緒はなごの嵌すかつた層かさね草履くさじゆばんをばたばた、引摺ひきずつて、派手はでな女めだから、まあ長襦袢ながじゆばんなんかちちちとしたらうよ。

長廊下ながのりやを伝つつて便所べんじやうへ行ゆくものだ。矢やだの、鉄砲てつぱうだの、それ大袈裟おおげさな帯おびが入いるのだから、便所べんじやうは大きい、広い事こと、畳畳で二畳位にじやうばいは敷敷けるのだと云いうよ。それへ入いらうとするかね、えへん！ ともいわず歌うたも詠よまないが、中に人ひとのいるような氣勢けいはいがするから、ふと立停たちどまつた、しばらく待つてても、一向いひやうに出いて来きない、氣きを鎮しずめてよく考かんえると、なあに、何も入いつてはいはしないようだったつさ。

ええ、姐ねえさん変かじやないか、氣きが差さすだらう。それからそのお小姓おこせは、雪洞ゆきどうを置おいて、

ばかりと戸を開けたんだ、途端に、大変なものが、お前心持を悪くしては可けない、これがみんな病のせいだ。

戸を開けると一所に、中に真俯向けになっていた、穢い婆が、何とも云いような顔を上げて、じろりと見た、その白髪というものが一通りではない、銀の針金のようなのが、薄を一束刈ったように、ざらざらと逆様に立った。お小姓はそれツきり。

さあ、お奥では大騒動、可恐しい大熱だから伝染ても悪し、本人も心許ないと云うので、親許へ下げたのだ。医者はね、お前、手を放してしまっただけでも、これは日ならず復ったよ。

我に反るようになってから、その娘の言うのには、現の中ながらどうかして病が復したいと、かねて信心をする湯島の天神様へ日参をした、その最初の日から、自分が上がるうという、あの男坂の途中に廁で見た穢ない婆が、掴み付きそうにして控えているので、悄然と引返す。翌日行くとまた居やがる。行つちや帰り、行つちや帰り、ちようど二十日の間、三七二十一日目の朝、念が届いてお宮の鰐口に縋りさえすれば、命の綱は繋げるんだけれども、婆に邪魔をされてこの坂が登れないでは、所詮こりや扶からない、ええ悔しいな、たとえ途中で取殺されるまでも、お参をせずには措くものかと、切齒をして、

下じめをしつかりとしめ直し、雪駄せつたを脱いですたすたと登り掛けた。

遮おそつていた婆は、今娘の登つて来るのを、可おそ恐しい顔で睨にらめ附けたが、ひよろひよると掴つかつて、冷い手で咽のどをしめた、あれと、言つたけれども、もう手足は利かず、講談でもよく言うがね、既に危あやうきそこへ。」

### 十三

「上かみの鳥居の際へ一人出て来たのが、これを見るとつかつかと下りた、黒縮緬三ツ紋の羽織せんだいひら、仙台平はかまの袴はかま、黒羽二重はぶたえの紋附を着て宗十郎頭巾ずきんを冠かぶり、金銀を鏤ちりばめた大小、雪駄穿ばき、白足袋で、色の白い好い男の、年若な武士で、大小などは旭ひにきらきらして、その立派さといったらなかつたそうだよ。石段の上の方から、ずつて寄つて、

（推参な、婆あ見苦しい。）と言いさま、お前、疫病神の襟首を取つて、坂の下へずでんどうと逆様に投げ飛ばした、可い心持じやないか。お小姓ありがたの難有ありがたき、神とも仏ともただもう手を合せて、その武士を伏拝んだと思うと、我に返つたという。

それから熱あつが醒さめて、あの濡紙ぬみを剥はぐように、全快をしたんだがね、病氣の品に依つて

は随分そういう事が有勝ありがちのもの。

お前の女に責められるのも、今の話と同じそれは神経というものなんだから、しつかりして気を確たしかに持つて御覧、大丈夫だ、きつとそんなものが連れ出しに来るなんて事はありやしない。何も私が学者ぶつて、お前さんがそれまでに判然した事を言うんだもの、嘘だの、馬鹿々々しいなどとは決して思うんじゃないよ。可いかい、姐さん、どうだ、解つたかね。」

と小宮山は且つ慰め、且つ諭したのであります、そう致しますと、その物語の調子も良く、取つた譬たとえも腑ふに落ちましたものと、見えて、

「さようでございますかね。」

と申した事は纒わづかながら、よく心も鎮つて、体も落着いたようであります。

「そうとも、全くだ。大丈夫だよ、なあにそんなに気に懸ける事はない、ほんのちよいと気を取直すばかりで、そんな可怪あやしいものは西の海へさらりださ。」

「はい、難ありがと有う存じます、あのう、お蔭様で安心を致しましたせいとか、少々眠くなつて参つたようでございますわ。」

と言にくい難にくそうに申しました。

「さあさあ、寐<sup>ね</sup>るが可い、寐<sup>ね</sup>るが可い。何でも気を休めるが一番だよ、今夜は附いているから安心をおし。」

「はい。」

と言つてお雪は深く頷<sup>うなず</sup>きましたが、静<sup>しず</sup>に枕<sup>まくら</sup>を向<sup>む</sup>へ返して、しばらくはものも言わないでおりましたが、また密<sup>そつ</sup>と小宮山の方へ向き直り、

「あのう、壁の方を向いておりますと、やはりあすこから抜け出して来ますようで、怖<sup>こ</sup>つてなりませんから、どうぞお顔の方に向かしておいて下さいましな。」

「うむ、可いとも。」

「でございますけれども……。」

「どうした。」

「あのう、極<sup>きまり</sup>が悪<sup>わる</sup>うございますよ。」

とほんのり瞼<sup>まぶた</sup>を染めながら、目を塞<sup>ふさ</sup>いでしかも頼<sup>たの</sup>母<sup>も</sup>しそう、力としますよう、小宮山の胸で顔を隠すように横顔を見せ、床を隔てながら櫛<sup>くし</sup>卷<sup>まき</sup>の頭<sup>かぶ</sup>を下<sup>くだ</sup>げ、口の上<sup>あたり</sup>まで衾<sup>ふすま</sup>の襟<sup>えり</sup>を引寄せましたが、やがてすやすやと寐<sup>ね</sup>入ったのであります。

その時の様子は、どんなにか嬉<sup>うれ</sup>し<sup>し</sup>そうであつた——と、今でも小宮山が申<sup>ま</sup>します。さ

て小宮山は、勿論寐られる訳ではありませぬから、しばらくお雪の様子を見ていたのであります。やや初夜過すぎとなりました。

山中の湯泉宿は、寂然しんとして静しずまり返り、遠くの方でざらりざらりと、湯女ゆなが湯殿を洗いながら、歌を唄うのが聞えます。

この界隈かいわい近国の芸妓げいしやなどに、ただこの湯女歌ばかりで呼びものになっているのがありますくらい。怠けたような、淋しいような、そうかというつと冴えた調子で、間あいを長く引張ひつて唄うたいますが、これを聞くと何となく睡眠剤のを服のまされるような心持で、

桂清水かつらしみずで手拭てぬぐい拾ひろった、  
これも小川の温泉ゆの流れ。

などという、いわんや巖いわに滴たるのか、湯槽ゆぶねへ落おつるのか、湯気の凝こったのか、湯女歌の相間あいま々々に、ぱちやんぱちやんと響ひびきまするのにおいてをや。

## 十四

これへ何と、前触まえふれのあつた百万遍まひんべんを持込みましたろうではありませんか、座中の紳士貴婦人方、都育ちのお方にはお覚えはないのであります、三太やあい、迷まいイ児ごの迷まいイ

児の三太やあいと、鉦かねを叩いて山の裾を廻る声だの、百万遍の念仏などは余り結構なものではありませんな。南無阿弥陀なむあみだぶつ……南無阿弥陀……南無阿弥陀。

亭主はさぞ勝手で天窓あたまから夜具をすつぽりであろうと、心に可笑おかしく思います、小宮山は山気膚はだに染み渡り、小用こようが達たしたくなりました。

折角せきやく可い心地で寐ねているものを起しては気の毒だ。勇士は轡くつわの音に目を覚ますとか、美人ふすまが衾ふすまの音に起きませぬよう、ソツと拔出して用達しをしてまいり、往復ゆきかえり何事もなかつたのでありまするが、廊下の一方、今小宮山が行った反対の隅の方で、柱が三つばかり

見えて、それに一つ一つ掛けてあります薄暗い洋燈ランプの間を縫って、ひらひらと目に遮った、不思議な影がありました。それが天井の一尺ばかり下を見え隠れに飛びますから、小宮山

は驚いて、入り掛けた座敷の障子を開けもやらず、はてな、人魂ひとたまにしては色が黒いと、

思いまする間も置かせず、飛ぶものは風を煽あおって、小宮山が座敷の障子へ、ばたりと留とまつた。これは、これは、全くおいでなすつたか知らんと、屹きつと見まする、黒い人魂に羽が生

えて、耳が出来た、明あきかに認めましたのは、ちよいと鳶とびくらいはあろうという、大きな蝠こ蝠こであります。

そいつが羽撃はばたきをして、ぐるりぐるりと障子に打附ぶつかって這はい廻る様子、その動くに従

うて、部屋の中の燈火が、明くなり暗くなるのも、思いなし心持のせいでありましようか。

さては随筆に飛驒、信州などの山近な片田舎に、宿を借る旅人が、病もなく一晩の内に息の根が止る事がしばしば有る、それは方言飛縁魔と称え、蝙蝠に似た嘴の尖つた異形なものが、長襦袢を着て扱帯を纏い、旅人の目には妖艶な女と見えて、寝ているもの懐へ入り、嘴を開けると、上下で、口、鼻を蔽い、寐息を吸つて吸殺すためだといまします。あらぬか、それか、何にしても妙ではない、かようなものを間の内へ入れてはならずと、小宮山は思案をしながら、片隅を五寸か一尺、開けるが早いか飛込んで、くると廻つて、ぴしやりと閉め、合せ目を押え附けて、どっこいと踏張つたのであります。しばらく、しっかりと押え附けて、様子を窺つておりましたが、それきり物音もしませぬので、まず可かつたと息を吐き、これから静に衾の方を向きますと、あにはからんやその蝙蝠は座敷の中をふわりふわり。

南無三宝と呆氣に取られて、目を睜つた鼻っ先を、件の蝙蝠は横撫に一つ、ばさりと当てる向へ飛んだ。

何様猫が冷たい処をこすられた時は、小宮山がその時の心持でありましよう。

くしゃみ  
 嚏もならず、苦り切つて衝立つておりますると、蝙蝠は翼を返して、斜に低う夜着の綴と  
じいと  
 糸も震うばかり、何も知らないですやすやと寐ている、お雪の寝姿の周囲をば、ぐるり、  
ぐるり  
 ぐるり、ぐるりと三度。縫つて廻られるたびに、ううむ、ううむ、ううむと幽かすかうめに呻いたと、  
 見るが否や、萎しおれ伏したる女郎花おみなえしが、無慙むざんや風に吹き乱されて、お雪はむツくと起上り  
 ましたのであります。小宮山は論が無い、我を忘れて後しりえどうにと坐りました。  
 蝙蝠ひるがえは翻つて、向側の障子の隙間から、ひらひらと出たと思つと、お雪が後に跟ついてず  
 つと。

蚊帳を出でてまだ障子あり夏の月、雨戸を開けるでもなく、ただ風の入るばかりの隙間  
 から、体がすつと細くなり、水に映つる柳の蔭の隠れたように、ふと外へ出て見えなくな  
 りましたと申しますな。勿論、蝙蝠に引出されたんで。

## 十五

小宮山は切齒はがみをなして、我赤檜あかがしを割つて八角に削りなし、鉄の輪十六を嵌はめたる棒を  
 携え、彦四郎定宗ひこしろうさだむねの刀を帯びず、三池の伝太光世みつよが差添さしぞえを前半まえはんに手挟たばさまずといえど

も、男子だ、しかも江戸ッ児だ、一旦請合った女をむぎむぎ魔に取られてなるものかと、追駈おっかけざまに足踏をしたのであります。あいにく神通がないので、これはあたりまえ当然に障子を開け、また雨戸を開けて、縁側から庭へ寝衣姿ねまき、跣足はだしのまままで飛下りる。

戸外おもては真昼のような良い月夜、虫の飛び交うさえ見えるくらい、生茂おいしげった草が一筋に靡なびいて、白玉の露の散る中を、一文字に駈けて行くお雪の姿、早や小さくなつて見えまする。

小宮山は蝙蝠のごとく手を拡げて、遠くから組んでも留めいきおいんず勢。

「おうい、おうい、お雪さん、お雪さん、お雪さん。」

と声を限り、これや串じょうだん戯しをしては可いけないぜと、思わずひとりごと独言を言いながら、露草を踏ふみしだき、薄すすきを搔かき分け、刈かる萱かやを押遣おしつて、章駈いだてん天のように追駈おっかけまする、姿は草の中に見え隠れて、あたかもこれ月夜に兔の踊るよう。

「お雪さん、おうい、お雪さん。」

間あわいもやや近くなり、声も届きましたか、お雪はふと歩あゆみを停とどめて、後を振返ると両の手を合せました。助けてくれと云うのであろう、哀れさも、不ふ便びんさもかばかりなるは、と駈おっかけ着ちける中、操うちあやつりの糸に掛かけられたよう、お雪は、左へ右へ蹠よろよろ躑しして、しなやかな姿を揉もみ、

しばらく争っているようでありました。けれども、また、颯と駈け出して、あわやという中に影も形も見失ったのであります。

廻へ、かの魚津の沖の名物としてあります、蜃気楼の中の小屋のようなのが一軒、月夜に灯も見えず、前途に朦朧として顕れました。

小宮山は三蔵法師を攫われた悟空という格で、きよろきよろと四辺を、しておりました。が、頂は遠く、四辺は曠野、たとえ蝙蝠の翼に乗つても、虚空へ飛び上る法ではあるまい、瞬一つしきらぬ中、お雪の姿を隠したは、この家の内に相違ないぞ、這奴！ 小川山

の妖怪ござんなれと、右から左へ、左から右へ取つて返して、小宮山はこの家の周囲をぐるぐる廻つて窺いしましたが、あえて要害を見るには当らぬ。何の蝸牛みたような住居だ、この中に踏み込んで、罷り違えば、殻を背負つても逃げられると、高を括つて度胸が坐つたのでありますから、威勢よく突立つて凜々とした大音声。

「お頼み申す、お頼み申す！ お頼み申す!!」

と続けざまに声を懸けたが、内は森として応がない、耳を澄ますと物音もしないで、かえって遠くの方で、化けた蛙が固まって鳴くように、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。と百万遍。眉を顰めた小宮山は、癩に障るから苛立つて喚いたり。

「お頼み申す。」

すると、どうぞごさいますよう、鼻ツ先の板戸が音もしないで、すらりと開く。

「騒々しいじゃないかね。」

顔を出したのが、鼻の尖った、目の鋭い、可恐しく丈の高い、蒼い色の衣服を着た。凄  
い年増。一目見ても見紛う処はない、お雪が話したそれなんで。

小宮山は思わず退つた、女はその我にもあらぬ小宮山の天窓から足の爪先まで、じろ  
りと見て、片頬笑をしたから可恐しいや。

「おや、おいでなさい、柏屋のお客だね。」

言語道断、先を越されて小宮山はとぼんと致し、

「へい。」と言つて、目をぱちくりするばかりであります。

「まあ、御苦労様だったね。さつきから来るだろうと思つて、どんなに待っていたか知れ  
ないよ。さあまあこつちへお上りなさい、少し用があるから。」

と言つた、文句が氣に入らないね、用があるなんざ容易でなさそう。

相手は女だ、城は蝸牛、何程の事やある、どうとも勝手にしやがれと、小宮山は唐突かかれて、度胆を掴まれたのでありますから、少々捨鉢の気味これあり、臆せず後に続くと、割合に広々とした一間へ通す。燈火はありませんが暗いような明るいような、畳の数もよく見える、一体その明がというと、女が身に纏っている、その真蒼な色の着物から膚を通して、四辺に射拡がるように思われるのであります。

「ちよいと託ける事があるのだから、折角見えたものを情なく追帰すのも、お気の毒だと思つて、通して上げましたがね、熟として待つていなさい。私の方に支度があるのだから、お前さんまた大きな声を出したり、威張つたり、お騒ぎだと為になりませんよ。」

と頭から呑んでかかつて、そのままどこかへ、ずい。

呑まれた小宮山は、怪しい女の胃袋の中で消化れたように、蹲つてそれへ。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、風が引いたり寄せたりして聞えまする、百万遍。

忌々しいなあ、道中じや弥次郎兵衛もこれに弱つたつけ、耐つたものではないと、密と四辺をしますると、塵一ツ葉も目を遮らぬこの間の内に床が一つ、草を銜えた神農様

の像が一軸懸つておりますので、小宮山は訳が解らず、何でもこれは気を落着けるにしく事なしだと、下ツ腹へ力を入れて控えております。またしても百万遍。小宮山はそれを聞くと悪寒がするくらい、聞くまい、聞くまいとする耳へ、ひいひい女の泣声が入りました。屹となつて、さあ始めやがった、あん畜生、また肋の骨で遣つてるな、このままじや居られないと、突立ちました小宮山は、早く既にお雪が話の内の一員に、化しおおしたのであります。

その場へ踏み込み扶けてくりようと、いきなり隔の襖を開けて、次の間へ飛込むと、広さも、様子も同じような部屋、また同じような襖がある。引開けると何もなく、やつぱり六畳ばかりの、広さも、様子も、また襖がある。がたりと開ける、何もなくて少しも違わない部屋であります。

阿房宮より可恐しく広いやと小宮山は顛倒して、手当り次第に開けた開けた。幾度遣つても筒の皮を剥くに異ならずでありますから、呆れ果ててと尻餅、茫然四辺をしますると、神農様の画像を掛けた、さつき女が通したのと同じ部屋へ、おやおやおや。

また南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と耳に入ると、今度は小宮山も釣込まれて、思わず南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

その時すらりと襖を開け、

「誰方どなただい、今お騒さわぎなすつたのは。」

「へい。」といった、後はもうお念仏になりそうな、小宮山は恐る恐る、女の微笑ほほえんでお  
ります顔を見て、どうかこうか、まあ殺されずに済みそうだと、思うばかりでございま  
す。

「一体物好ものずきでこんな所へ入つて来たお前さんは、怖いものが見たいのだろう。少々ばか  
りね。」

「いえ、何。」と口の内。

「まあ、おいでなさい。」

妻わらわに跟ついてこつちへと、宣示のりしめすがごとく大様に申して、肅然と立って導きますから、  
詮方せんかたなしに跟ついて行く。土間が冷く踵くびすに障つたと申しますると、早や小宮山の顔色蒼そうぜ  
然ん！

話に聴いた、青色のその燈火ともしび、その台、その荒筵あらむしろ、その四辺あたりの物の氣勢けはい。

お雪は台の向むこうへしどけなく、崩折くずおれて仆たおれていたものであります。女は台の一方へ、こ  
の形かたなしの江戸ッ児を差置いて、一方へお雪を仆した真中まんなかへぬつくと立ち、袖短そでみじかな

着物の真ま白しろな腕を、筵の上へ長く差し伸のびして、ざくりと釘を一つかみ

「どうだね、お客様。」

「どう致しまして。」

小宮山は慇いんぎん懃ぎんに辞退をいたしまする。

## 十七

「これを知っていなさるかえ。」

と二の腕を曲げて、件くだんの釘を乳の辺へ齎もたらして、掌てのひらを拡げて据えた。

「どう致しまして。」

「知らない?。」

「いえ、何、存じております。」

「それじゃこれは。」

「へい。」

「女の脱ぬけがみ髪。」

小宮山は慌しく、

「どう致しまして。」

「それじゃ御覧。」

と撮つまんで宙で下げたから、そそげた黒髪がさらさらと動きました。

「いえ、何、存じております。」

「これは。」

「存じております。」

「それから。」

「存じております。」

「それでは、何の用に立つんだか、使い方を知っているのかえ。」

迂うっかり潤知らないなぞと言おうものなら、使い方を見せようと、この可おそろ恐しい魔法の道具を振廻すばやされては大変と、小宮山は逸早く、

「ええ、もう存じておりますとも。」

と一際念入りに答えたのであります。言葉尻も終らぬ中うち、縄も釘もはらはらと振りかかった、小宮山はあツとばかり。

ちよいと皆様みなさまに申上げますが、ここでどうぞ貴方がたがあつと仰おつしや有つた時の、手附かおつき顔かおつき色いろに体の工合ぐあいをお考えなすつて下さいまし。小宮山は結局つまり、あつと言つた手、足、顔、そのままで、指さきの尖さきも動かなくなつたのであります。

「よく御存じでございましたね。」

と嘲ちやうろう弄ろうするごとく、わざと丁寧ていねいに申しながら、尻目しつめに懸かけてにたりとして、向むへ廻こり、お雪の肩かたへその白い手を掛かけました。

畜生ちくせい！ 飛たりついて扶たすけようと思つたが、動うごけるところの沙汰さたではないので、人はかような苦しい場合ばいにも自ら馬鹿ばか々々々々しい滑稽こっけいの趣味しゆみを解とけるのであります、小宮山はあまりの事ことに噴ふきだ出して、我われと我身わがみを打う笑い、

「小宮山何なにというざまだ、まるでこりや木戸銭きどぜには見てのお戻りかへりという風ふうだ、東西とうせい、」  
と肚はらの内うち。

女おんなはお雪の肩かたを揺ゆり動うごかしましたが、何なにとも不思議ふしぎな凄すこい声こゑで、

「雪ゆきや、苦くるしいか。」

お雪ゆきはいとど俯うつむ向むいていた顔を、がっくりと俯うつむ向むけました。

「うむ、もう可よい、今夜こんやは酷ひどい目めに逢あわしやしないから、心配しんぱいをする事ことはないんだよ。こ

れまで手を変え、品を変え、色々にしてみたが、どうしてもお前は思い切らない、何思い切れないのだな、それならそれで可いようにして上げようから。」

と言聞かしながら、小宮山の方を振向いたのであります。

「お客様、お前は性悪だよ、この子がそれがためにこの通りの苦労をしている、篠田と云う人と懇意なのじゃないか、それだのにさ、道中荷が重くなると思つて、託も聞こうとはせず、知らん顔をして聞いていたろう。」

と鋭い目で熟と見られた時は、天窓から、悚然として、安本亀八作、小宮山良助あつと云う体にござりまする活人形へ、氷を浴せたようになりました。

「その換り少しばかり、重い荷を背負わして上げるから、大事にして東京まで持つて行きなさい。託というのはそれなんだがね、お雪はとも扶らないのだから、私も今まで乗懸った舟で、この娘の魂をお前さんにおんぶをさして上げるからね、密と篠田の処まで持つて行くのだよ。さぞまあお邪魔でございませうねえ。」

小宮山がその形で突立つたまま、口も利けないのに、女は好きな事をほざいたのであります。

それから女は身に纏つた、その一重の衣を脱ぎ捨てまして、一糸も掛けざる裸体になりました。小宮山は負惜、此奴温泉場の化物だけに裸体だなど思っておりません。女はまた一つの青い色の罎を取出しましたから、これから怨念が顕れるのだと恐を懐くと、かねて聞いたとは様子が違い、これは掌へ三滴ばかり仙女香を使う塩梅に、両の掌でぴたぴたと揉んで、肩から腕へ塗り付け、胸から腹へ塗り下げ、襟耳の裏、やがては太股、脹脛、足の爪先まで、隈なく塗り廻しますると、真直に立上りましたのであります。

小宮山は肚の内で、

「東西。」

女はそう致して、酌面に台に向いまして、ちちんぷいぷい、御代の御宝と言つただか何だか解りませぬが、口に怪しい呪文を唱えて、ばさりばさりと双の腕を、左右へ真直に伸したのを上下に動かししました。体がぶるぶると顫えたと見るが早いか、搔消すごとく裸身の女は消えて、一羽の大蝙蝠となりましてございます。

例のごとくふわふわと両三度土間の隅々を縫いましたが、いきなり俯けうつむになってお雪の顔へ、顔を押当て、翼でその細い項うなじを抱いて、仰向けあおむに嘴くちばしでお雪の口をおさ圧えまして、すう、すうと息を吸うのであります。

これを見せられた小宮山は、はツと思つて息を引いたが、いかんともする事かな叶わず、依然としてそのあツと云うてい体。

二度三度、五度六度、やや有つて息を吸取つたと見えましたが、お雪の体は死んだものようになつてはたと横様にたお仆れてしまいました。

喫驚びっく仰天はこれのみならず、蝙蝠がすツと来て小宮山の懐へ、ふわりと入りいましたので、再びあツと云つて飛び上ると同時に、心付きましたのは、旧もとの柏屋の座敷に寝ていたのであります。

大息といきを吐いて、蒲団の上へ起上つた、小宮山は、自分の体か、人のものか、よくは解らず、何となく後見うしろらるるような気がするので、振返つて見ますと、障子が一枚、その外に雨戸が一枚、明らさまに開あいて月が射さし、露なり、草なり、野も、山も、渺びよう々びようとして、鶏とり、犬の声も聞えませぬ。何よりもまず氣遣わしい、お雪はと思う傍そばに、今息を吸取られてたお仆れたと同じ形になつて、生しやうじ死は知らず、姿ばかりはありました。

小宮山は冷たい汗が流れるばかり、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、と隣で操り進む百万遍の声。

「姐さん、姐さん、」

小声で呼んでみたが返事がないので、もしやともう耐らず、夜具の上から揺振りました。

「お雪さん。」

三声ばかり呼ぶと、細く目を開いて小宮山の顔を見るが否や、さもさも物に恐れた様子で、飛着くように、小宮山の帯に縋り、身を引緊めるようにして、坐った膝に突伏します。戦く背中を小宮山はしつかと抱いた、様子は見届けたのでありますから、哀れさもまた百倍。

怖さは小宮山も同じ事、お雪の背中へ額を着けて、夜の明くるのをただ、一刻千秋の思で待構えまする内に疲れたせいとか、我にもあらずそろそろと睡みましたと見えて、目が覚めると、月の夜は変わり、山の端に晴々しい旭、草木の露は金色を鏤めておりました。

密と膝から下すと、お雪はやはりそのままに、すやすやと寐入っている。

「お早うございます。」

と声を懸けて、機嫌聞きに亭主が真先、百万遍さえ止みますれば、この親仁大元気で、

やがてお鉄も参り、

「お客様お早うございます。」

十九

小宮山は早速うがいちようず嗽手すい水を致して心持もさつぱりしましたが、右左から亭主、女共が問い懸けまする昨晚の様子はいや、ただお雪がちよいとうみな魔まされたばかりだと言つて、仔細しさいは明しませんでございました、これは後の事のちを慮きづかつて、皆が恐れげなくお雪の介抱をしてやる事が出来るようにと、氣を着けたのであります。

お雪の病氣を復なほすにも怪しいものを退治るにも、耆婆きばへんじやく扁鵲へんじやくに及ばず、宮本武蔵、岩見重太郎にも及ばず、ただ篠田の心一つであると悟りましたので、まだ、二日三日も居て介抱もしてやりたかつたのではありますけれども、小宮山は自分の力では及ばない事を知り、何よりもまず篠田に逢つてと、こう存じましたので、急がぬ旅ながら早速出立を致しました。

その柏屋を立ちまする時も、お雪はまだ昨夜ゆうべのまま寝ていたのであります。失礼な起

しましように口々に騒ぐを制して、朝餉あさげも別間べつまにおいて認めしたため、お前さん方が何も恐こわがる程の事はないのだから、大勢側に附いて看病をしておやんなさいと、暮々も申し残して後髪を引かれながら。

その日、糸魚川から汽船に乗って、直江津に着きました晩、小宮山は夷屋えびすやと云う本町の旅籠屋に泊りました、宵の口は何事も無かったのでありますが、真夜中にふと同じ衾しとねにお雪の寝ているのを、歴々ありありと見ましたので、喫驚びつくりする途端に、寝姿が向むきになつたその櫛巻こぼが溢れて、畳の上へざらりという音。

枕に着かるどころではありませぬ、ああ越中と越後と国は変つても、女の念おもいは離れぬかとまさかに魂を託ことうかつたとまでは、信じなかつたのでありますけれども、つくづく溜息をしたのであります。

夜が明けると、一番の上り汽車、これが碓氷うすいの隧トンネル道ミチを越えます時、その幾つ目であつたそうで。

小宮山は何心なく顔を出して、真暗まっくらな道の様子を透すかしていると、山清水の滴る隧道の腹へ、汽車の室内の灯ともしびで、その顔が映つたのであります、と並んで女の顔が映りました。確たしかにそれがお雪の面影。

それぎり何事もなく、汽車は川中島を越え、浅間の煙を望み、次第に武蔵の平原に近づきます。

上野に着いたのは午後の九時半、都に秋風の立つはじめ、熊谷土手から降りましたがその時は篠を乱すような大雨でございまして、俵の便も得られぬ処から、小宮山は旅馴れてはいる事なり、蝙蝠傘を差したままで、湯島新花町の下宿へ帰ろうというので、あの切通へ懸りました時分には、ぴつたり人通りがございません。後から、

「姐さん、参りましょうか、姐さん。」

と声を懸けたものがある。

振返つて見ると誰も居ませんで、ただざあざつという雨に紛れて、轍の音は聞えませぬが、一名の車夫が跟いて来たのでありました。

小宮山は慄然として、雨の中にそのまま立停つて、待てよ、あるいはこりや託つて来たのかも知れぬと、悚然としましたが、何しろ、自宅へ背負い込んで妙ならずと、直ぐに歩を転じて、本郷元町へ参りました。

ここは篠田が下宿している処であります、行馴れている門口、猶予わず立向うと、まだ早いのに、この雨のせいかな、もう閉つておりましたが、小宮山は馴れている、この門

と並んで、看護婦会があります、雨滴あまだれを払いながらその間の路地を入ると、突つき当あたりの二階が篠田の座敷、灯も点ついて、寝ない様子。するとまだ声を懸けない先に、二階ではその灯を持って、どこへか出たと見えて、障子が暗くなりました。しばらく待っていても帰りませぬ。

下へ下りたのであろうも知れぬ、それならばかえって門口で呼ぶ方が早手廻しだと、小宮山はまた引返して参りますと、つい今錠の下りていた下宿屋の戸が、手を掛けると訳もなく開あきましたと申します。

何事も思わず開けて入り、上あがり框がまちに立ちましたが、帳場に寝込んでおりますから、むざとは入らないで、

「篠田、篠田。」

と高らかに呼よほわりますると、三声とは懸けさせず、篠田は早速に下りて来て、

「ああ、今帰ったのかえ、さあさあまあ上りたまえ。」

と急遽いそいそ先に立ちます。小宮山は後に跟ついて二階に上り、座敷に通ると、篠田が洋燈ランプを持つたまま、入口に立たちどま停とまって、内を透すかし、

「おや、」と言つて、きよろきよろ四辺あたりをみまわしてありますが、何か気抜のしたらしい。

小宮山はずつと寄つて、その背を叩かぬばかり、

「どうした。」

「もう何も彼も御存じの事だから、ちつとも隠す事はない、ただ感謝するんだがね、君が連れて来て一足先へ入ったお雪が、今までここに居たのに、どこへ行つたらう。」

と真顔になつて申します。

小宮山はまた悚然とした。

「ええ、お雪さんが、どんな様子で。」

「実は今夜本を見て起きていると、たつた今だ、しきりにお頼み申しますと言う女の声、誰に用があつて来たのか知らぬが、この雨の中をさぞ困るだろうと、僕が下りて行つて開けてやったが、見るとお雪じやないか。小宮山さんと一所だと言う、体は雨に濡れてびっしり絞るよう、話は後からと早速ここへ連れて来たが、あの姿で坐っていた、畳もまだ湿っているだろうよ。」

と篠田はうろろしてはたばた畳の上を撫でてみます。この様子に小宮山は、しばらく腕組をして、黙つて考えていましたが、開き直つたという形で、

「篠田、色々話はあるが、何も彼も明日出直して来よう、それまでまあ君心を鎮めて待つ

てくれ。それじや託り物を渡したぜ。」

「ええ。」

「いえ、託り物は渡したんだぜ。」

「託り物つて何だ。」

「今受取つたそれさ。」

「何を、」と篠田は目も据らないで慌てております。

「まあ、受取つたと言つてくれ。ともかくも言つてくれ、後で解る事だから頼む、後生だから。」

魂の請状を取ろうとするのでありますから、その掛引は難かしい、無暗と強いられ  
て篠田は夢現とも弁えず、それじやそうよ、請取つたと、挨拶があるや否や、小宮山は篠  
田の許を辞して、一生懸命に駈出した、さあ荷物は渡した、東京へ着いたわ、雨も小止み  
かこいつは妙と、急いで我家へ。

翌日取も置かず篠田を尋ねて、一部始終悉しい話を致しますると、省みて居所も知らさ  
ないでいた篠田は、蒼くなつて顫え上つたと申しますよ。

これから二人連名で、小川の温泉へ手紙を出した。一週間ばかり経つて、小宮山が見

覚えのあるかの肌に着けた浴衣と、その時着ておりました、白粉おしろいあか垢あかの着いたあわせ袷あわせとを、小包で送って来て、あわれお雪は亡なくになりましたという添状。篠田は今でも独身ひとりで居おります。

二人ともその命日は長く忘れませんと申すのであります。飛んだ長くなりまして、御退屈様、済みませんでございました、失礼。

明治三十三（一九〇〇）年五月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第五卷」岩波書店

1940（昭和15）年3月30日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 湯女の魂

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>